



外来感染症診療の次世代・実践テキスト

評者 志水太郎 獨協医大主任教授・総合診療医学

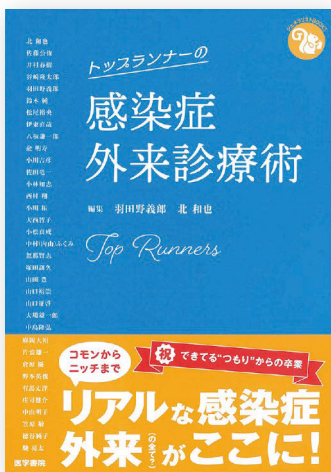
感染症に関する書籍はあまたあるが、「外来診療」に特化したものはそれほど多くない。本書は、大学病院の感染制御部の副部長としても、感染症関連の書籍の著者としても活躍目覚ましい羽田野義郎先生、そして、感染症への造詣も深く、奈良県の医療・教育を地域から牽引するやわらぎクリニックの副院長である北和也先生という、業界の衆望を担うリーダーらのもとに完成した“外来における感染症診療の実践的テキスト”である。感染症科の専門外来の診療ではなく、「一般（内科）診療」のなかで出合う外来での感染症の指南書であるため、読者対象は広い。いわゆる“総合診療”的に、症状や健康問題に分け隔てなく対応するうえで必ず出合うであろうコモン〜比較的コモンな感染症の問題にフォーカスを絞っている。

章立ても、第1章の基本疾患（かぜ、インフルエンザ、気管支炎・肺炎、尿路感染症、皮膚軟部組織感染症、性感染症など）、第2章の対応を知っておくべき疾患（パルボウイルスB19感染症、麻疹と風疹、ムンプス、HIVなど）、第3章の緊急疾患（髄膜炎、敗血症、椎体炎、化膿性関節炎など）、第4章の長期マネジメントが重要な疾患（結核、非定型抗酸菌症）、第5章の外来診療の感染症関連で知っておきたいこと（高齢者対応、小児対応、妊産婦、渡航者、感染対策、外来静注、ワクチン）と、広範かつ網羅的で、プロブレム・オリエンテッドな構成になっている。そのため、現場で欲しい標準的な情報へのアクセスが容易と言える。この網羅性と硬派さは羽田野先生のアイデアなのだろう。

さらに一読して、本書には標準的記載に留まらない読者を惹きつける魅力があると感じた。その理由が最初わからなかったが、「読者目線の視点がある」ということだと2巡目に気づいた。明確で必要十分な表やシェーマ。そして、それぞれに短文の解説がついた各章末の参考文献は、本書から原著にアプローチする読者にもフレンドリーである。また、「とりあえずこれだけは」という章始めのポイント、ヘッドラインとして現場目線で最も重要なポイントがわかり実用的である。加えて、ケースバーストであり、読者にも実感が湧きやすい。さらに「クリニックではどうする？」のコーナーは、検査手段やベッドなどの限られた医療現場での対応についての現場目線の示唆に富んでいるし、処方例は具体的な著者の臨床行動がわかり参考になる。「私の失敗談」や、ページ下の脚注が実は単なる脚注ではなく、北先生いわく“にぎやかな”本文の合いの手になっていることなども、編者のユーモアが感じられて親近感が湧く。このあたりは、漫画をはじめさまざまなサブカルチャーに造詣の深い北先生の色が出ているのかもしれない。

脇を固める著者の先生方も、感染症や総合診療の業界に足を踏み入れている先生方なら誰しもが「おお、この先生が！」となるような気鋭の若手〜ベテランの先生方である。このような著者陣を迎えた編者お2人の統率力も光る。

なお、本書は医学書院の新しいレーベルである「ジェネラリスト BOOKS」シリーズの一角を成している。巻末にこのシリーズの書籍が列挙されているが、これらのシリーズの本と併せて読むことで、本書の文上・文底に込められたメッセージがさらに明らかになり、深い理解が得られることと思う。



《ジェネラリスト BOOKS》 トップランナーの 感染症外来診療術

羽田野義郎、北 和也＝編

定価：本体 4,200 円＋税
A5・356 頁／医学書院／2019
[ISBN978-4-260-03633-7]